

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：35407

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23262

研究課題名（和文） 平和都市 未完のプロジェクト：近現代広島の「都市」化と「復興」を検討主題として

研究課題名（英文） Peace City, an Unfinished Project: The "Urbanization" and "Reconstruction" of Hiroshima in Modern Times

研究代表者

仙波 希望 (SEMBA, Nozomu)

広島文教大学・人間科学部・准教授

研究者番号：50847697

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、平和都市 広島がいかに生成され、またどのようにその都市理念と建造環境が絡み合いながら都市的動体を描き出してきたかを明らかにすることである。そのうえで、都市理論とフィールド分析の相互連関を意識しながら、本研究は次のような作業をすすめてきた。(1)近現代広島をめぐる都市的検討を実施するための理論的枠組みの彫琢 ポストコロニアル都市理論の導入。(2)「大広島」のスローガンを軸とした1920年代から1950年代に至る広島の都市運動ならびにメディアイベントの検討。(3)都市理論と事例検討を重ね合わせるかたちでの最終的なアウトプットの作成。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「1945年8月6日を起点としない」ことによるのみ解明可能な、空間的系譜の存在を明らかにしたことである。たとえば米山リサが提起した「同心円の想像力」的枠組みの限界を指摘したうえで、平和都市の「復興」の起源を原爆被害でなく、近代アーバンゼーションの水脈から捉え返した視点がそれにあたる。本研究はこの理想の系譜を言説、知、そしてアクターの同一性を根拠に戦前にまで辿って解明し、「復興」をつくりあげる都市的原動力が戦前から発露していたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify how the "Peace City" of Hiroshima was created and how its urban ideology and built environment have intertwined to make an urban dynamism. In doing so, this study has been conducted with an awareness of the interconnections between urban theory and field analysis as follows. (1) Developing a theoretical framework for conducting an urban study of modern and contemporary Hiroshima: introducing postcolonial urban theory. (2) An examination of urban movements and media events in Hiroshima from the 1920s to the 1950s, centered on the slogan "Greater Hiroshima". (3) Final output will be created by combining the urban theory and case studies written above.

研究分野：都市研究

キーワード：広島 都市 メディア 都市社会学 平和都市

## 1. 研究開始当初の背景

2011年の東日本大震災、およびそれに連なる福島第一原子力発電所事故以降、各新聞紙上にはカタカナでの「フクシマ」表記がなされるようになった。ここにおいて、同時代的な課題としての「ヒロシマ」を問い直そうとする機運が高まった。いわば〈平和都市〉の復興のモデルケースを広島に見ようとするそれともいえる。

しかし単純に問うならば、この〈平和都市〉の復興とは何を指すのだろうか。もとより復興の二字を英訳すれば、定訳は存在しないにせよ、reconstruction や revival、ないしは restoration といった単語があてられる。その全てに共通するのは、接頭辞の「re-」である。これが back や against などの意味をもつことは広く知られているが、重要なのは、そのラテン語までに遡る語義として、「強意」「執着」が含まれていることである。つまり、過去に属する理念ないしはトポロジカルな意向を、その後にあらためて再現しようとする意図が読みとれるのだ。

つまるところ、〈平和都市〉広島の復興を考えるにあたり、その「始点」を1945年8月6日に置くことは必ずしも妥当でないのではないかと。本研究はこのアイデアを導きの糸としながら、〈平和都市〉という空間のテキストの過程を分析し、また戦前からのそのコンテキストの形成を追及するという着想を得た。以上のような視点に立ちながら、(1)都市理論的分析および(2)ケーススタディとしての検討の二つの方向性を念頭におきながら、近現代広島をめぐる〈平和都市〉化のダイナミズムを明らかにする。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、〈平和都市〉広島がいかにかに生成され、またどのようにその都市理念と建造環境が絡み合いながら都市的動体を描き出してきたかを明らかにすることである。上記のように、本研究は、1945年8月6日を境に広島が一挙に〈平和都市〉に変貌を遂げたという視点を採用しない。むしろそれ以前から以降に至る都市的水脈に着眼し、多様なアクターを視野に入れながら歴史社会的にその系譜を探究する。

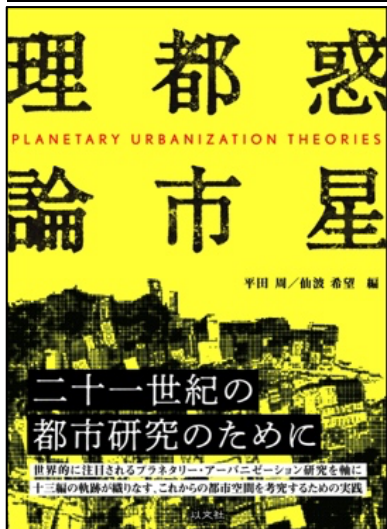
具体的にとりうる方針としては、(A)都市空間形成における、被爆者—非被爆者、パワーエリート—市民といった二項対立的視点を放棄し、(B)「かつての『軍都』広島が〈平和都市〉ヒロシマに転換した」とする史観を棄却する。(A)に関しては、〈平和都市〉という都市空間を形成した主体をパワーエリートに限定したとしても、その人々もまた被爆者であったことを考えれば、こうした被爆者—非被爆者といった二項対立的枠組みがどれほど機能するかは不明瞭である。また(B)についても、いずれの都市理念も一義的であり続けることは不可能であり、時代や空間的変転に応じながら、何らかの変更を迫られるものであることに鑑みれば、都市像に単一のアイデンティティを見定めることはそもそも不可能となる。こうした視角から、〈平和都市〉広島の生成と変容を考察する。

## 3. 研究の方法

都市理論とフィールド分析の相互連関を意識しながら、本研究は次のような作業をすすめてきた。(1)近現代広島をめぐる都市的検討を実施するための理論的枠組みの彫琢——ポストコロニアル都市理論の導入。(2)「大広島」のスローガンを軸とした1920年代から1950年代に至る広島の都市運動ならびにメディアイベントの検討。(3)都市理論と事例検討を重ね合わせるかたちでの最終的なアウトプットの作成。

## 4. 研究成果

### (1)近現代広島をめぐる都市的検討を実施するための理論的枠組みの彫琢



仙波希望・平田周編著, 2021, 『惑星都市理論』以文社。

仙波希望, 2020, 「惑星都市彷徨——ウィルスの蔓延する街路を踏査することは可能か」『建築討論』。

2021年4月に編著『惑星都市理論』を刊行した。これは世界的な都市研究の潮流——プラネタリー・アーバニゼーション、集合的都市理論、ポストコロニアル都市理論——を主に視野に入れながら、まさに都市探求の道具としての理論の現代的様相を把握すべく実施された共同研究の成果である。同書は『図書新聞』『読書人』といった書評紙および『日本都市社会学会年報』や『現代社会学理論研究』などの学術誌にて書評が掲載された。またこの仕事により、南山大学社会倫理研究所(2022年1月)および横浜国立大学都市イノベーション研究院(2022年2月)からの招聘をうけ、講演・ディスカッションを行うこともできた。同書は、代官山蔦屋書店での刊行イベントやブックフェアが実施されるなど(2021年5月)、一定程度、

一般読者層へも認知されたと考えている。この書籍において筆者はプロジェクトおよび「ポストコロナル都市理論は可能か」・「あとがきにかえて：それでも惑星都市を彷徨するために」を執筆した。

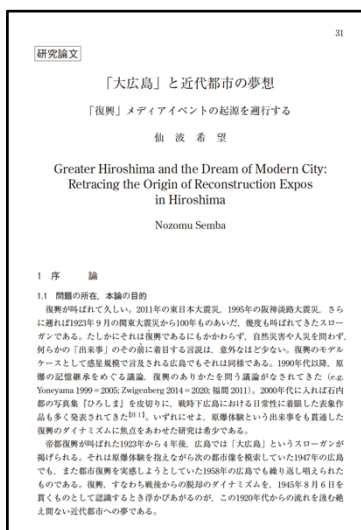
とりわけ前者の論文では、カリフォルニア大学バークレー校のアナーニャ・ロイ、そしてユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのジェニファー・ロビンソンらによって主導され、建築や現代美術など都市研究を超えて言及されつつある「ポストコロナル都市理論」の方法論と全体像を明るみに出すべく、「ポストコロナル都市理論はなぜ必要とされているのか」といった問いのもと議論を展開した。

本論は、ロイやロビンソン、エリック・シェパードなどの議論を手掛かりに、ポストコロナル都市研究における狙いや背景、可能性を整理し、その目指すところを詳かにした。ここでは、旧来の都市研究が無批判に活用してきた西洋近代的ルールモデルを脱構築すべく、グローバルな規範を周辺／辺境に位置づけられた地域に還元されていくその過程自体を描出した。同時にこのポストコロナル都市理論に対する先述のスコットとストーパー、ジェイミー・ペックらの批判的議論を取り上げ、ポストコロナル都市理論における課題を吟味した。それは単一の都市研究史や視点の回避によって理論的指標を喪失してしまうところであり、同時に、無数に「理論」が創出されてしまうところに集約される。

ロイはこうした批判に対して再批判を試みている。旧来からの学知に支配的な「理論の文化」それ自体が地図上のさまざまな都市を理解するために適切であるかを検討することなく、我々は理論を獲得することはできない。西洋的なもの自体を作り上げるプロセス自体が、同時にクリエイティブ・シティなどの施策を介して惑星規模で同様の破壊的開発をもたらしているとロイは喝破し、そのうえで「都市的なもの」の未決定性といった理論視角を提起するに至る。

## (2)「大広島」のスローガンを軸とした1920年代から1950年代に至る広島都市運動ならびにメディアイベントの検討

仙波希望, 2022, 『大広島』と近代都市の夢——『復興』メディアイベントの起源を遡行する』『広島文教グローバル』6:31-46.



(1)で導出したポストコロナル都市理論的視座のもとで、近代広島を対象としたケーススタディの成果が本論である。1920年代後半に提唱された「大広島」と、それを具体化すべく展開された1929年の昭和産業博覧会を対象に、その内実と含意を明らかにすることをとおして、本論は原爆体験という出来事をも貫通した都市復興のダイナミズムの端緒を描出した。『大広島の建設』などの刊行資料、『中国新聞』といった地方メディア、観光地図などの宣伝媒体を資料体に、近現代広島都市像が彫琢されるうえでのひとつの源流の痕跡を提示した。

本論が端的に明らかにしたのは、「大広島」と昭和博覧会、いわば広島都市像を彫琢していくうえでのひとつの源流を指し示しているという事実である。都市部と農村部の矛盾、熊平の提唱した経済・生産・商工都市への飛翔と現状としての遅れ、テクノロジーとモダニズムの理想に溢れながらも確固たる都市アイデンティティを打ち立てられることになかった昭和博覧会——。これらの要素は全て、原爆体験を貫きながらも都市復興のダイナミズムのなかで解決が試みられる都市的課題であり続けたのだ。

以上のような含意は、以下本研究の最終的なアウトプットにつながる準備作業として位置づけられる。

## (3)都市理論と事例検討を重ね合わせるかたちでの最終的なアウトプットの作成

2022年度内での単著の刊行を予定している。『(平和都市)の解体：広島における都市空間の系譜学』(仮)と題した同書は、上記の研究の集大成として、都市・広島をめぐる歴史社会学的研究をさらに展開させるものとして上梓する見込みである。原稿に関しては大凡完成しており、ここから数ヶ月かけて校正作業・修正作業を終了させることを目標としている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 仙波希望	4. 巻 -
2. 論文標題 惑星都市彷徨 ウィルスの蔓延する街路を踏査することは可能か	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築討論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 仙波希望
2. 発表標題 メディア研究×地域研究の新しい可能性 - 平和都市 広島を例に -
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 仙波希望・平田周編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 以文社	5. 総ページ数 448
3. 書名 惑星都市理論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------